

香港・長州島における木を守る運動

深尾葉子 (GEN世話人・大阪外大講師)

93年8月より半年余り、香港で生活していました。受け入れ先は、香港中文大学で、イギリスが1896年に租借した新界の沙田というところに住んでいました。そこは、かつての田園地帯と、近年急速な勢いで開発されたニュータウンとが交錯しており、また大陸中国との国境も近く、九龍と広州を結ぶ鉄道の沿線でもあります。ところで、この香港では、香港島などイギリスが入ってから開発され、また重点的に植民地経営が行われてきたところには比較的緑が豊かなのに比して、この新界の山々はほとんどがはげ山であるのが印象的です。熱帯に属すこの地域でののはげ山の原因が、土壌的、気候的なものなのか、人為的あるいは歴史的なものなのか(おそらく後者の要因が大きい)一度調べてみたいと思いつつ、半年間の滞在を終えて帰国してしまいました。

ただその間、興味深いニュースに会いましたので、報告をしたいと思います。それは、現在新空港が建設されているランタオ島の隣にある小さな島長州島で、香港政府による道路建設の計画がもちあがり、それによって切り倒されようとしている1本のガジュマロの木を住民が守ろうとして立ち上がったという話題です。この島は人口も数千人で、これまでは限られた電気自動車以外は車が走る道もなく、また住民もそれを望んでこなかったのですが、現在香港政府が、島を貫く縦貫道路を

計画し、観光開発しようとするなかで、その道路の開発予定地に立つガジュマロの木が切り倒されることになり、それにたいする反対運動が住民側からおこされたというわけです。問題となった木はちょうど現在の市街地のまんなかにもあり、樹齢数百年、住民の間では“風水木”として親しまれてきました(風水木とは、GENが植林をおこなっている山西省でもよく見られ、お墓や家を守るものとして、大切にされている木)。この街にもかつて同様の木がたくさんあり、すでに家屋の建造などで切り倒されてなくなっているとのこと。今回は、数少ない残された木をめぐって対立が生じ、住民側が抗議行動をとるようになったのです。新聞の報道でそのことを知った我々は、香港中文大学人類学科の学生たちと、1本の木をめぐってどんな対立が生じ、また守ろうとする側は、どんな主張をもって守ろうとしているのかを調べるべく現地へ赴き、インタビューをしました。その結果、1本の木にさまざまな、歴史的社会的な意味が隠されていることがわかりました。詳しい内容と写真は次回に……。

編集後記

くちなしの花も強い日差しにあつという間に茶色くなってしまいました。ひんやりしめった空気に漂う甘い香り

歌でひろげる ~♪ 心の輪

子どもの頃くちずさんだ懐かしいしらべを、思い出してみませんか。「日本童謡の会近畿本部」が中国山西省・黄土高原の植林にチャリティー、としてふれあいコンサートを開きます。

●日時 8月20日(土)

開場午後1時、開演午後1時30分

●場所 中之島公会堂

地下鉄・バス「淀屋橋」下車

●会費 大人(15歳以上) 1,000円

小人(3~14歳) 500円

*GEN事務所にチケットを用意しています。ご希望の方はご連絡ください。

新デザインお目見え

日本ビジネススクール専門学校の協力で~

ジャーン!封筒が新しくなりました。作品展でのチャリティー販売やパネル展示でお世話になっている日本ビジネススクール専門学校デザイン学科の学生さんたちが競作してくれました。この封筒(角6形)は浜田拓哉さんの作品です。ありがとうございました。募金箱用のシールのデザインもいただいていますので、お楽しみに!(完成までもうすこし時間をください……)

を傘の下で味わうのが梅雨時の楽しみのひとつだったのに、このから梅雨ではそれもかかないません。さかさてる坊主をつるそうかな…
(東川)



会費・講読料・緑化基金・物品など協力者のお名前 (1994.6.6~7.4)

赤窄 富夫	有安 美加	井口 昇司	伊豆 利壮	磯野 宏昭	伊東瑠璃子	上羽 修	瓜谷 忠夫
大崎 石子	大野 晶子	岡戸 清司	沖田 妙子	落合智恵子	小野 信爾	甲斐 智子	梶原 洋一
加藤 寛	神坂 玲子	上村悦治郎	川島 和義	川端 昌夫	河村 智子	岸本 宏	小柳 俊明
坂田 隆	佐野 純子	下岸 貞夫	白神テル子	杉田 定志	鈴木 七郎	全港湾労働組合建設支部西成分会	
全通信労働組合吹田支部	蘇 建 源	祖谷登希雄	高田 直俊	谷口 孝	田山 啓子	植田 劭	
鶴丸 幸代	土井登喜子	土井 昌夫	中島 重勝	日本樹木保護協会	林 眞紀	林 みつよ	
北方ひろみ	本田 次男	正木 通夫	松崎 栄一	森本 英夫	矢野 教	山内ちづ子	李 建 華
若狭 浩吉	渡部 昌子	匿名 7名	【以下 401会関係者】	石川喜久三	伊藤 源文	佐野 稔	奥村 昌一
神谷 孫市	神田 護	北田 三二	木下伊之助	葛巻 英親	榊原 愛子	西口 博次	椎田 孝一
巽 健造	永井ふみ子	中村 好康	西岡藤次郎	西岡李三郎	西川 四郎	森 弘蓮	萩野 友郎
橋本 文男	服部 清一	原田 貞一	平野 幸男	松島 敬治	松田 ノブ		山口 晴夫
山崎 正三	和田 一男	渡辺 喜次	前川鯉次郎				

香港・長洲島における木を守る運動（2）

深尾 葉子（GEN世話人・大阪外大講師）

前回長洲島となっていたのは「長洲島」の誤りでした。また、香港は「亜熱帯」ですが前回「熱帯」となっていました。お詫びと訂正を致します。

開発によって伐採の話が持ち上がった、長洲島の木は、古い市街区のほぼ真ん中に位置しており、波止場から島の反対側の浜辺へ抜ける道をさえぎるようにして生えている。周辺は飲食店や土産物店が立ち並んでおり、我々が訪れた日曜日には、香港島などからやってきた観光客でごったがえしていた。丁度反対側が請願を出した直後だったこともあり、木の周辺には、保護を訴える横断幕や、また周辺の店などに思い思いの語句を書き連ねた、反対のはり紙が貼り出されていた。

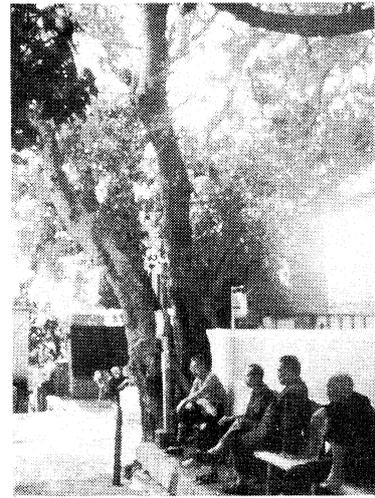
この木は樹齢300年。島の「風水木」として信仰の対象となっていた木で、根元にはお札や、お供えもの、線香などが飾られており、人びとの信仰のあつさを示していた。この木にまつわる言い伝えは多くあり、この木の近くで



島の街路沿いに立つ木。

お参りをすると病気が治る、とか生気を得られるとか言われている。恐らく「気」を発する木なのであろう。なかでも、日本軍がこの島に上陸した際、多くの島の人びとが殺されたが、この木に吊るされた人だけが生き残ったという言い伝えや、また逆にこの木の周りでたくさんの人が殺されたために、人びとは慰霊のためにいっそうこの木を拝むようになった、また、かつてこの木の枝を切った男性が数日後に突然亡くなったという話など、その内容も様々であった。いずれにしても、この古木は、島の人びとの記憶を刻み込み、島の人びとと共に歴史の激動を生きてきたのである。

今回の伐採計画は、消防上の安全確保を理由とした島全域にわたる道路拡張にともなって浮上してきたものである。しかし、開発には利権がつきもの。香港島までフェリーで約1時間という地の利のために、ベッドタウン化しつつあるこの島で、土地を持つものと持たざるもの間で、同じ親族内でも対立が生まれている（ここは離島なので、新界と同様土地の所有権を有する「原居民」が存在する）。当然、この木の伐採をめぐるでも、利権を持つ側と、借家等で立ち退きをせまられている側とで、対立が生まれている。この木の近くに住みつき、地域に溶けこんで生活している日本人一家のご夫妻は、そんな島の変容ぶりを話してくれた。



木陰で涼をとりながら過ごす島の老人。この木にも様々な思い出が刻まれているのだろう。

周辺の家屋のはり紙に目をやると「榕樹本無罪、奈何官無情」（榕樹には罪はないのに、お上の無情はいかんともし難い）だとか、この木は島の命脈だから、切ってしまうのは島の地脈が乱れる、都市の発展は重要だが、環境保護や緑化はもっと重要、といったキャッチフレーズが次々と目に入る。島の人びとが、風水や環境保護といった、様々な理由を用いて、木を守ろうとしているのが見て取れた。また、島を歩くうち、他の同様の古木の下で、老人たちが涼みながら話をしたり、孫を遊ばせたりしている風景が印象的であった。島はいま音をたてて様変わりしようとしている。反対運動の結果はまだ出ていないが、おそらく開発の計画を動かすことは至難と思われる。

人びとの記憶の拠り所となり、また社交の場ともなっていた村の木々がいま、華南の各地で開発とともに姿を消しているのだろうか、と同様の運命にある他の多くの木々に思いをはせ、また1本の木が持つ意味の深さを考えさせられる1日であった。

黄土高原緑化調査団報告会のお知らせ

黄土高原で緑化協力をはじめた3年目、この夏初めて日本から専門家の調査団が現地を訪れました。新しい事実や問題点などの発見があいつぎ、多くの収穫を得たと同時に、今後への課題も多く提示されました。

その現地の詳しい様子を、調査団団長の立花吉茂先生に報告していただきます。ビデオの上映、ワーキングツアーの参加者の報告もあわせて行う予定です。

- 日時：9月30日（金）18時30分～21時
- 場所：弁天町市民学習センター
（JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅すぐ）
- 参加費：700円

GEN講演会「日本の環境破壊と財政危機」のお知らせ

日本の政治構造を浮き彫りにした「ゼネコン疑獄」一問題は政治腐敗だけではありません。高速道路や橋など大規模開発によって日本の自然環境は大きく破壊されました。そのうえそれらの多くは、利用率が予想をはるかに下回り、作り捨てに近いものも少なくありません。「土建国家」を支えるために、膨大な資金が投入され、そのツケは結局、国民にまわってきているのが現状です。

長く環境問題を研究され、行政の内側からもこれらの問題をシビアにみてこられた河宮信郎さんに語っていただきます。

- 講師：河宮信郎さん（中京大学教授）
- 日時：10月28日（金）午後6時30分～9時
- 場所：弁天町市民学習センター
- 参加費：700円